

KYOKYU 118

特集

『子どもふれあい教室』について



京都教育大学

<表紙>

『ギター』

附属養護学校 藤原 和正

【作成者コメント】

ぼくはたのしい音になるこのギターをかくことにしました
1かいならずとポロロン
ギターの音にあわせて
きいろい絵の具をぺたんぺたん
もういちどならずとジャララン
きれいな音になるように
みず色の絵の具をぺたぺたぺた
つぎはどんな音になるのかな

【作成にあたってのエピソード】

心惹かれる作品に出逢う機会はこれからもあるかもしれない。しかし、そのような作品が生まれる瞬間に出逢えることはあまりない。ギターの音色が奏では消えていくように、たくさんの色がこの作品上で現れては隠れていった、その時間を共に過ごせたことを幸せに思う。できあがった時、「きれいな音になりそうなギターができたね」とそっと話しかけると、にこーっと嬉しそうにうなづいてくれた。



このマークは、大学基準協会の定める大学基準に適合した大学が使用できるマークです。

CONTENTS



<表紙> 附属養護学校 藤原 和正

特集

- 2 『子どもふれあい教室』について
教務課教務グループリーダー
山口 博

海外見聞録

- 10 タイ国一雑感・雑観・雑勘
教育学科教授
堀内 孜

留学生の声

- 12 うちは京教生やねん！
日本語・日本文化研修留学生
Rungruangsuparat Supawan
(ルンルアンスパラット スッパワン)

TOPICS

- 13 京都教育大学のマスコットキャラクター
「そったくん」誕生 募集～決定まで

研究余滴

- 14 原点としての子ども
教育学科教授
岩田 純一

京教今昔物語

- 16 附属高等学校校歌に想う
附属高等学校教諭
田中 静子

京教学内探訪

- 18 ころとからだのオアシスを目指します
保健管理センター所長
中村 道彦

附属学校園だより

- 20 スペシャルクリーンデー
附属京都小学校副校長
多田 光利
- 21 伝統的な行事『臨海学舎』・『林間学舎』
附属京都中学校副校長
橋本 雅子
- 22 ～マレーシア研修旅行～
附属高等学校副校長
斉藤 正治
- 23 地域連携・「向こう三軒両隣」のおつきあい
～「ごく当たり前」からはじめよう～
附属養護学校副校長
小竹 健一

非常勤講師から

- 24 学校経営改善講座を担当して
学校教育非常勤講師
天笠 茂
- キャンパス散策授業
理学科非常勤講師
西田 律夫

卒業生の声

- 25 京都教育大学大学院を修了して
京都市立大藪小学校教諭
勝木 清隆
- 学ぶこと、人生の楽しさを子どもたちに
大阪市立榎並小学校教諭
山本 幸子

ようこそ大先輩

- 26 田村一二先生と知的障害児(者)教育
吉永 太市

読者の皆さまへ・編集後記

- 27 地域連携・広報委員会委員長
武蔵野 實

『子どもふれあい教室』について

教務課 教務グループリーダー 山口 博

『子どもふれあい教室』は今夏で第10回を迎えました。本学にとっては、恒例の真夏の一大イベントになっています。

今年度の実施に向けて、既に昨年度末から動きはじめていました。開催時期をいつにするか、本学スタッフの人数（実地教育会委員及びフレンドシップ事業専門委員会委員）、参加学生及び最も大事な児童・生徒の募集人数及び安全の確保等々です。

もちろん言うまでもありませんが、過去実施の反省点を踏まえ、さらにより良いものにするために、工夫を凝らし、英知を絞って話しあいます。

今年度は、本学が学部改組を行い、総合科学課程の募集を停止して、教員養成課程に一本化したこと、1回生の基礎ゼミの授業を活用して、授業の案内を精力的に行ったことが影響してか200名近い学生が説明会会場、大講義室1に集まってきてくれました。

委員会としては一応の目安を参加学生100名、参加児童・生徒200名を上限設定していたのですが、嬉しい誤算でした。

あまり実施規模が大きくなり過ぎると、授業として成り立つか、子ども達の安全が保証されるか、行き届いた事前指導が可能か、また、施設の収容能力（保護者説明会及び参加学生と児童・生徒の顔合わせ）が確保されるか等の不安材料が懸念され、説明会当日、本来言葉にすべきでは無かったのですが、この授業がいかに大変か、責任のある行事かを委員のメンバー及びフェロー（昨年この『子どもふれあい教室』に参加してくれた先輩）が手を替え品を替えて・・・実際はそのとおりなのですが、平成18年度『子どもふれあい教室』はこの5月10日をもって実質的にスタートしました。

たびたび、授業と述べてきましたので、どのような授業かを、説明する必要があると思います。簡単に概要を述べます。

現在、学校現場では体験学習の比重が増してきており、教師にも学習に関わるさまざまな指導力が要求されるようになってきています。

本学では、このような教育現場の実情に対応して、実際に子どもと「ふれあい」ながら活動し、体験し、学習する、「教室」を設定しています。「子どもふれあい教室」と言います。小・中学生を大学のキャンパスで、学生「受講生」たちが体験学習の三日間を指導しつつ、子どもとの信頼関係を作っていく授業です。

教科や講義室での学習と違った緊張感や親愛感があります。その中で、子ども達の感覚や考え方、好み、喜び等々を身体で実感し、また集団を指導する方法を学びます。子どもを理解する上で最も効果的な“授業”の一つだと言えます。

lessnessとした2単位（平成10年度以降）の授業科目：実地教育A（教育課題対応科目）なのです。今年実施の形態は、参加学生132名を15班編成にし、185名の児童・生徒を実施予定のイベントの希望に叶うよう、概ね12名を各班に配し実施しました。（参加者へは事前にイベント案内と参加確認と併せて、どの班に入りたいのかを第1～3の希望調べを行っています）実施イベント及び日程等は後で掲載します。

前後しましたが、この行事は、文部科学省の施策の一つである教員養成大学・学部によるフレンドシップ事業に基づいた「子どもふれあい教室」で現在、京都市・宇治市の両教育委員会の後援を受けて実施しています。

現在の実施形態及び開催場所は当初からでなく、いろいろな歴史を辿りながら、ここしばらくは基本的に大学キャンパス内で三日間の日帰り行事として実施してきました。もちろん本行事は、大学の地域や社会に対する貢献活動の一つとして定着してきましたが、学内外の実に多くの人々に支えられて実施することが出来ました。感謝の気持ちで一杯です。感謝の対象は、広く多岐にわたりますが、その一部を披露しておきたいと思います。学内の殆どの部署等（各課をはじめ、保健管理等センター、生活協同組合など）安全のためのパトロールの強化は墨染・藤森の地元交番及び伏見警察署。病気・怪我等で救急車で迅速な対応は京都市消防局、ざっと、このような見えないところでの支えがあつて、今日に至ってきました。今年度も無事終えることができました。

平成9年度実施の第1回は大学キャンパスでの行事（9月21日（日）、23日（火））の日帰り行事と京都市花脊山の家での宿泊を伴う野外出行（10月10日（金）～12日（日））の二本立てで、参加学生28名、参加児童は小学生94名で実施後報告会も行われました。参加学生も2回生が中心でした。（現在は1回生が中心で、例外的に若干名2回生が参加）

第2回は夏キャンプ（2泊3日、京都市花脊山の家）と秋キャンプ（1泊2日、京都教育大学キャンパス）で実施されました。

参加学生32名、参加児童96名（両方に参加した児童もいました。）

第3回は実施場所を宇治市総合野外活動センター「アクトパル宇治」に変更し、8月11日（水）～14日（土）の3泊4日の宿泊行事日程で実施しました。参加学生約20名、参加児童約90名で、新たに医師、看護師（現在は看護師）が加わり、更に学外からボランティア諸氏の協力を得て、新設の「アクトパル宇治」でテント使用でのキャンプ形態での実施となりました。

第4回は、宿泊せず、大学キャンパスを会場として8月7日からの3日間で実施し、午前に関講式と仲間作りゲームを行い、最終日を活動発表会とその準備に充てるという枠組みで実施しました。

参加学生約20名、参加児童約100名での実施となりました。

第4回以降は、ほぼ、その枠組みを踏襲しながら、今年度までの実施形態となっています。

第5回は「子どもふれあい教室」の中に、キャンパス行事として本学構内で実施する狭義の“子どもふれあい教室と” 附属養護学校の施設を利用して実施する“とっておきの夏休み”の二本立てで実施しました。併せて54名の学生が参加しましたが、既に授業の単位修得者の12名の学生（一部大学院生を含む）が、経験者としてアドバイスやバックアップしてくれるために参加してくれました。参加してくれた児童・生徒は160名と大幅に参加者が増えました。その要因は、宿泊合宿を改め、日帰りの形式に改めたことが、参加の簡便化に繋がり、支持されたのではないかと考えられます。このころ「猛暑の中で」という言葉が定番となってきて「子どもふれあい教室」が現在に引き継がれています。

第6回は本学キャンパスで実施。（8月5日から7日）参加学生とフェローを併せて50～60名、参加児童・生徒は約150名でした。

第7回～9回の開催は、参加学生及び児童・生徒の数に変動があるにせよ、ほぼ現行と同形式で実施しました。ただし、第8回以前まで実施していた、報告会・シンポジウムなどは、参加者が少ない等の理由で、第8回以降は開催していません。

これまで、ごく、大まかに「子どもふれあい教室」がどのようなものなのかを記述し、10年間のその歴史を振り返ってきましたが、なかなか、実際イメージしにくいと思います。そこで今年度実施の実行事とイベント日程並びに実施イベント・活動内容（17年度・・・今年度分は現在作成中）及び活動写真を以下に掲載します。その前に、授業での単位認定までの道のりには、結構厳しいものが課せられます。提出物

や雑務が山ほどあります。

一部を紹介します。

実施前 班別イベントの簡単な説明。

（児童・生徒へのアピール用）

イベントの内容は子ども達が、どの班に入りたいのかの優先順位を決める上での、大きな要素となります。

実施本番中 連絡帳を3日間記入。

保護者説明会時に保護者に配布し、期間中子ども達と保護者の方、担当学生と教員、それに大学との思いをつなぐ、連絡帳です。保護者から・・・学生から・・・おさまの本日の様子など

子どもふれあい教室記録

実施後は個人レポート（電子媒体で）をA4版1枚程度にまとめて提出。各班毎に班別イベントの活動内容を報告の体裁で提出（報告冊子用）

保護者説明会当日は受付及び正門・西門で児童・生徒のお迎えと会場内での整理等

実施当日の雑務等

正門、西門で児童・生徒のお迎えと学内箇所での安全確保のための立哨、また、麦茶を冷やすための氷を生協に取りに行くこと等、以外に多くの分担業務があります。

紙面が残り少なくなってきましたので、報告を兼ねて、全くの私見ですが、実施形態は第1回のように、宿泊を伴ったものにすべきだと思っています。手間と時間をかけて、寝食を共にして、得られるもの、体験できるものは、数え切れない程のものがあると確信しています。一生、心のどこかに残るものだと思っています。それと、第9回から、値上げ値上げのご時世に敢えて、参加費の値下げに踏み切りました。5,000円から3,000円に、そして、第8回から大学事務局前の楠をこの『子どもふれあい教室』のTシャツのシンボル・マークとして取り入れ、自前でTシャツを作りました。現在も継続中です。実施期間中、学長始め、この行事の大学スタッフが着用し、この「子どもふれあい教室」のスタッフであることの内外へのアピールと、開催できることの自負として機能しています。

また、今年度実施をより盛り上げるためと、第10回の節目であることを記念して幟（のぼり）を作り、両門に掲げると共に実施当日、各班に1本ずつ渡し、自由に活用してもらいました。『子どもふれあい教室』を理解して頂くうえでの、参考になると思われるものを、いくつか、資料として付けさせていただきます。ありがとうございました。

来年もたくさんの、子ども達が元気一杯大学キャンパスを賑わせてくれるのを心待ちにしています。

1. 「子どもふれあい教室」

① 実施行事

◎フレンドシップ事業「子どもふれあい教室」参加説明会
日 時：平成18年5月10日（水）13時30分～15時00分
場 所：京都教育大学 大講義室Ⅰ

◎学生への事前指導（1）
日 程：平成18年5月24日（水）13時00分～
場 所：京都教育大学 F26講義室
内 容：各班のイベント内容について班間の調整

◎学生への事前指導（2）
日 程：平成18年6月7日（水）13時00分～
場 所：京都教育大学 大講義室Ⅱ
内 容：各班のイベント内容についての議論と班間の最終調整

◎学生への事前指導（3）
日 程：平成18年6月21日（水）13時00分～
場 所：京都教育大学 大講義室Ⅰ
内 容：各班のイベント内容についての議論

◎学生への事前指導（4）
日 程：平成18年7月5日（水）13時00分～
場 所：京都教育大学 大講義室Ⅱ
内 容：子どもとの接し方、人権、安全などの講習会

◎イベント進行状況の報告と検討
日 程：平成18年7月21日（金）16時30分～
場 所：京都教育大学 大講義室Ⅱ
内 容：イベントの進行状況の報告・確認と準備の仕上げ

◎保護者説明会および子ども達・保護者と学生との顔合わせ
日 程：平成18年7月23日（日）
8時30分～12時00分
場 所：京都教育大学 大講義室Ⅱ、F26
参加者：児童、生徒、保護者、学生、教職員、教育委員会

◎イベント行事
日 程：平成18年8月1日（火）
9：30～16：30
場 所：京都教育大学構内各所
参加者：児童、生徒、学生、教職員、保護者

日 程：平成18年8月2日（水）9：30～16：30
場 所：京都教育大学構内各所
参加者：児童、生徒、学生、教職員

日 程：平成18年8月3日（木）9：30～16：30
場 所：京都教育大学構内各所
参加者：児童、生徒、学生、教職員、保護者
最終日は、午前中報告会の準備を行い、午後に報告会を行う。
また、写真の申込み受付を行う。

② イベント日程

第1日【8月1日（火）】
9：00 全スタッフ集合 各班受付準備（1.2名は正門へ）
9：30 受 付 児童・生徒は名札を受け取り、自分の班を確認する。
10：00 集 合 大講義室Ⅱ
開 講 式 開会の挨拶
柳イブニング・駿池 プログラム説明、注意事項
10：30 移 動
全体ゲーム 仲間作りゲーム
12：00 昼 食 班別に食事（18年度は弁当形式・・・3日間とも）
13：00 イ ベ ント 班別プログラム
第1班～第15班
※
15：00 後始末開始
15：30 各班反省会 連絡帳記入各班注意事項等を行う
16：00 解 散 大講義室Ⅱに集合後、児童・生徒帰宅
16：30 イベント実施場所の整理及び明日のイベントの準備

第2日【8月2日（水）】
9：00 全スタッフ集合 各班受付準備（1.2名は正門へ）
9：30 受 付 児童・生徒は名札を受け取り、自分の班を確認する。
10：00 宿題・ミニ研究 班別プログラム
第1班～第15班
・・・18年度新規
12：00 昼 食 班別に食事
13：00 イ ベ ント 班別プログラム
第1班～第15班
15：00 後始末開始
15：30 各班反省会 連絡帳記入各班注意事項等を行う
16：00 解 散 大講義室Ⅱに集合後、児童・生徒帰宅
16：30 イベント実施場所の整理及び明日のイベントの準備

第3日【8月3日（木）】
9：00 全スタッフ集合 各班受付準備（1.2名は正門へ）
9：30 受 付 児童・生徒は名札を受け取り、自分の班を確認する。
10：00 発表会準備 各班で発表会
12：00 昼 食 班別に食事
13：00 発 表 会 各班10分程度の発表を行う。
15：00 後始末開始 イベント実施場所の整理等
15：30 解 散 大講義室Ⅱに集合後、児童・生徒帰宅
16：00 スタッフ等反省会
17：00 「子どもふれあい教室」3日間イベント終了



平成18年度「子どもふれあい教室」班別イベント 5. 31

班	イベント
1 ジグジャグ	ビー玉イリュージョン キラッキラッ 浪漫飛行 ビューン
2 ☆☆すーざんズ☆☆	ウォーター・サプライズ みんなで遊んで友達になろう！ 夏を作ろう (make summer) 自分の手で物を作り出してみよう
3 てりやきパンデライオン	・手つなぎ鬼・ろくむし ・だるまさんが○○・どん鬼 (けた) 仲良くなっちゃおうぜ！！つなが れみんなの輪 ・竹の水鉄砲・宝探しゲーム 思いっきり遊べ！！闘志を燃せ！！
4 VIVA☆☆ヤハギ♪	自分の手で作ろう！ ～君の手が必要です～ 元気に遊びまわろう！！ ～投げて飛ぶ夏～
5 ぱっしょん☆	「好き・スキ・すき♡」 紙すきでハガキを作る 「鳥人間ミニコンテスト」 ・リサイクル飛行機 ・うちわ飛行機等
6 イナバウアー♪	友情バンダナ バンナダDE海よりも深い友情を！ リサイクルを学ぼう 牛乳パックDEフリスビー！
7 ☆しゃいしゃい	Tシャツ染めYO！！ ～2006夏コレクション～ 水合戦！！ ～藤森夏の陣～
8 夏みんかん	☆みんなでゲーム☆ ～ドッチボール、鬼ごっこ、何 でもバスケット～ 水でっぼうでBAN！ ビショビショになっちゃおう！！

班	イベント
9 プリキング☆	お絵描きア・ミーゴ ～力を合わせて絵を創ろう～ 体を鍛える子どもの京教トレ ーニング ～走って、かくれて、もっと仲 よくなろう～
10 ぶぶっぴDo	プラ板バン作ろう！ ～焼こう！描こう！バンバン作 ろう！～ カラフルシャボン玉 ～みんなのキズナを割らない！ 割れない！～
11 パワー♡パフ	外☆遊び 走りまわって、友達になっちゃ おう あわ実験☆あわ合戦 シャボン玉で遊んじゃおう
12 やまちゃんず	ミッション・シッポッシブル ふれあいしっぽ取り対決！！ バブ・スターウォース 飛べ！バブロケット！！
13 バックンCho	染五郎 草木染めで団扇団扇作り OH！！宝◇◇ お宝を見つけよう
14 チームデジデジ	宝探し シャボン玉作り
15 Teamまじれんちゃん	みんな仲良くなろう！ ・フルーツバスケット ・しっぽ取り ・紙ヒコーキ作り等 シャボン玉作り ・シャボン玉の中にシャボン玉 ・割れないシャボン玉

ピカピカ☆泥団子

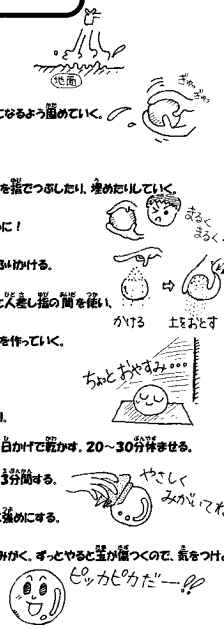
～好きなだけ汚れちゃえばいいじゃない!～

◇ 用意するもの

- よく乾いた土
- 少量の水(やかんやペットボトルに入れると運びやすい)
- 乾いたどうさんなど柔らかい布(だんごを休ませるときの場所)
- みかく布(安物か使い古したストッキングがよい)

◇ 作り方

- ① 土に水をくまき、やわらかくして、土台になるだんごを作る。
最初はギュギュッと握り、平の水分をしぼり出す。きれいな器等にひたひたまで水をいれていく。
- ② 最初の2～3分は少々蒸らすくても大丈夫。
乾いた土(少しぬれていてもいい)をかけて、握ったり、でこぼこを握ったり、丸めたりしていく。
- ③ ひたすら乾いただんごを作っていく。でこぼこは絶対にないように!
- ④ だんごを握ってきたらだんごを持ち、もう片方の手で乾いた土をかきつける。
すると...土が山のように盛り上がるので、それを器の前後と左右の隅を握り、
そとどろのように落す。ここからはひたひたに、ゆめやかな表面を作っていく。
- ⑤ ④の作業を30～40分続け、さめの輪が1層薄くなる。
- ⑥ 土をかけて、だんごにくっつかないようにして、土はよく乾かす。
- ⑦ 乾いたどうさんなど、柔らかい布の上にだんごをそのまま置いて、自然に乾かす。20～30分休ませる。
- ⑧ ④と同様にして、土をかきつけてはひたひたまで作業を2～3分間する。
- ⑨ さらさらの状態でだんごの表面をこする。はじめはやさしく、徐々に強めにする。
- ⑩ 15～20分くらい休ましたら、ジャージかストッキングでだんごをみかく。ずぼんと音が響くので、音を付けよう。
- ⑪ 乾いたら、乾燥☆



ペットボトルロケット

♪ 用意するもの

- 炭酸飲料のペットボトル 5本
- ビニールテープ
- 両面テープ
- ホッチキス
- カッターナイフ
- ハサミ
- ペンチ
- 定規
- 噴射口
- ポリエチレンテープ

♪ 作り方

① ダミータンク

- ① 点線線の辺りをカッターで切る
- ② カッターの刃をよこ向きで整える
- ③ 切り取った部分に1×1.5cmのビニールテープを貼る
- ④ 貼り込みを入れた部分を内側に折る

② ハネ

- ① 上の図のように切る
- ② 真ん中の部分を平らになるようにし、折り押し

- ③ ①と同じように作る
- ④ 2枚を重ね合わせて同じ大きさにする
- ⑤ 上の図に印をつけて線に沿って切る
- ⑥ 上図の右側になるように工作する
- ⑦ ホッチキスの針をビニールテープで隠すように貼る。のりごみ部分を作る。

③ スカート

- ① ハネを作ったときのように切る
- ② 点線線部にハネを4つつける
- ③ 何もない部分にペットボトルの底にダミータンクをつける
- ④ ダミータンクの上にポリエチレンテープをつける
- ⑤ 何もない部分にペットボトルの注ぎ口の方にハネをつけたスカートをつける
- ⑥ つないだ部分はビニールテープかガムテープで固定する
- ⑦ キャップを取って噴射口につけかえる

♪ 遊ばせ

- ペットボトルの中に1/2ほど水を入れ、発射台に設置する。
空気を溜めてペットボトル内の気圧を上げる

発射☆

～ホグワーツへようこそ～

2班
2日目午後

魔法のリサイクル工作

A、キーホルダー作り

- ① 左図のように、モーター・割りばし・穴を開けた空き缶をセロハンテープでつなぎます。その空き缶の中に、あらかじめ細かく切ったペットボトルを入れ、アルコールランプで熱しながらモーターを回転させると、なんと穴から繊維がワタの糸のように出てきます。
 - ② 出てきた繊維を、あらかじめフェルトで作った人形の首のところに詰め込み、糸で入り口の部分を縫い止めれば、ペットボトル繊維を綿の代わりに使ったかわいいうキーホルダーの出来上がり!!
- ※①は危険なので、必ず大人の人と一緒にするようにしましょう!

B、万華鏡作り

- 用意する物: 直径4.8cm長さ10.5cmのトレイットペーパーの芯、縦10cm横11.1cmのプラオメガ板、折り紙、ビーズ、トング、両面紙(底はあくまで一例です。うまく合うように工夫して下さい。)
- ① プラスチック板を一边3.7cmの三角柱にして、周りに黒色の折り紙を内側に向けて貼ります。
 - ② 一方の口をトレイットペーパーでふたをし、その周りに1cm巾に切った両面紙を0.5cmだけ狭して貼り付けます。
 - ③ できたスペースにビーズをお好みで入れ、もう一度トレイットペーパーでふたをします。
- ④ 最後に③でできたものをトレイットペーパーの芯に差し込み、穴を開けた両面紙で反対側の口をふたをすれば完成!!
- ※お好みで、周りに折り紙を巻いたりビーズを付たりして下さい。

竹の水てっぽう

～びしょぬれになっちゃえば良いじゃない!～

◇ 用意するもの

- 竹(細いもの1本、太いもの1本)
- スポンジ
- のこギリ
- だこ糸
- さい
- パケツ(水を持ってこれるもの)
- ぼう布
- 着替え
- 取手(のこギリ使用時に使う)

◇ 作り方

- ① 太い竹を節から節まで切る。一方には節がない(竹の半かのどける)ように切る。
- ② 細い竹を1で切った竹より長めに切る。
- ③ ②の竹の先にスポンジを巻き、その上からぼう布をかけてだこ糸でしっかり縛る。
細い竹を太い竹の中に入れてとき、水がこぼれるすき間がないように巻く量を調節する。しっかりしよう!!
- ④ 太い竹の節があるほうにさいで小さく穴を開けて、乾燥☆

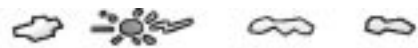
◇ 遊び方...太い竹の中に水を入れ、細い竹で押し出す。

【ポイント】

- ☆ 水てっぽうの長さや、穴の径、穴の位置は自由、いろんなパターンを試してみよう。
- ☆ 一度押し出したあと細い竹を引くと、布が取れてしまいがちなので、しっかりとだこ糸でくくろう。
- ☆ あまり強く水を押し出しすぎると、竹が折れてしまうことがあるので気を付けよう。
- ☆ のこギリやさいなどの刃物には注意しよう!!
- ☆ 遊んだあとぬれたら、ちゃんと着替えて、かぜをひかないようにしましょう!

速くまでぶかばか!!





平成18年度 子どもふれあい教室

今年で10回を迎える「子どもふれあい教室」は、異なる学校や年齢の児童・生徒が大学生と一緒にごイベント参加して、もの作りや自然観察などの活動を行い、お互いのふれあいや自然とのふれあいの体験学習をする行事です。

参加する大学生(約80~100名)は、京都教育大学の1回生が中心で、教員になることを強く志望している学生です。学生は、将来教師としての実践的指導力を養うために、大学の授業の一部として参加します。

なお、この授業は文部科学省が推進しているフレンドシップ事業の一環として、京都教育大学が京都府教育委員会と宇治市教育委員会の後援(申請中)を得て、企画し、実施するものです。

行事日程・内容(予定)

7月23日(日) 9:30~11:30

説明会・顔合わせ



8月 1日(火)~ 2日(水) 9:30~1

6:00

イベント、宿務・E2研究

8月3日(木) 9:30~15:30

イベントまとめ、午後発表会
写真展(購入申込)等



兄弟、姉妹等も履力別々の団となります。
ただし、参加人数、イベントの数等によりやむを得ず同団ということもあり得ますので、あらかじめご了承ください。

※イベント期間中の昼食は大学構内各茶を予定しています。

※保護者の方は、7月23日(日)は必ず出席してください。
また、8月3日(木)午後に、写真の申込み等を行いますので、保護者の方もなるべく出席してください。

※行事等の詳細については、参加者確定後お知らせします。

【イベント一覧(予定)】

外遊び(缶けり、だるまさんがころんだ等)

Tシャツ染め・草染め

シャボン玉づくり

ペットボトルロケット

楽しい理科実験

竹の水鉄砲づくり(竹)

学内探検

スライムづくり

キャンドルづくり

宝さがし

光る夏だんごづくり

その他色々なイベントを実施予定です



募集要項



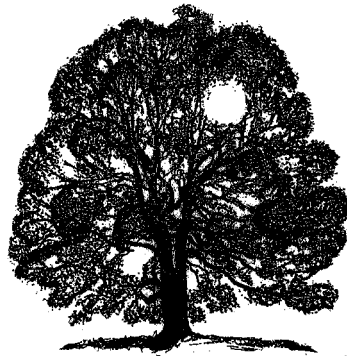
京都教育大学 教務課連携教育支援担当

TEL 075-644-8831

(平日9時~12時30分、13時30分~17時)

京都新聞 2006, 6/16 朝刊

外遊びや科学実験
先生の卵と遊ぼう
京大が8月「教室」
京都教育大(京都市伏見区)は、教員志望の学生が指導する体験学習教室「子どもふれあい教室」を八月二日から四日まで、同大で開く。対象は小学三年から中学生。異なる学校や学年の子どもの班をつくり、外遊びや理科実験、草染め、ペットボトルロケットやだるまご作りなどを体験する。定員百四十人(申し込み多数の場合は抽選)。参加費三千円(昼食代など)。申し込みは六月二十二日まで。ホームページ <http://www.kyokyo-u.ac.jp>。問い合わせは同大教務課連携教育支援担当(075)644(4)44(4)。



2005 子どもふれあい教室





タイ国一雑感・雑観・雑勘

教育学科教授 堀内 孜

タイとの付き合いが始まって17年余となる。1989年度1年間、JICA（国際協力機構）の専門家としてタイ国教育省に勤務してから、この雑文が出る時には丁度80回のタイ国訪問をしたことになる。この間、JICAの仕事（1991～94年の「地域教育センター設立」プロジェクトの実施やタイ国支援委員会委員として等）や大学の交流活動（地域総合大学－Rajabhat university：RU－やチュラロンコン大学との姉妹校提携による学生や教職員の交流）、学会の定期共同セミナーの統括や教師教育に関する調査研究、またタイ国教育省顧問としての講演・講義やRUへの日本語教員の派遣事業を進めてきたが、気が付けば京都の街よりもバンコクの街の方が詳しくなっていた。京教大で指導したタイからの留学生も50人近くになり、またタイの大学や教育省に勤務する友人、知人も300人を越えたことだろう。

この「海外見聞録」への執筆を依頼されて、タイ国以外の国について書くわけにはいかないが、また「見聞」した「何か」に絞って書くことも難しい。ついには見たまま、聞いたまま、感じたままの「雑感・雑観・雑勘」を記すことをお許し願いたい。

1. 「教師の日」と「ワイ・クルー」

タイでは「未だ」教師の権威は広く認められている。国民の祝日として「教師の日」があり、これとは別に幼稚園から大学まで新年度の第2週には新歓行事として新入生が教師に感謝する儀式が全ての学校で行われ、「ワイ・クルー」と呼ばれている。（「ワイ」は合掌して拝むこと、「クルー」は教師）私も何度か「ワイ・クルー」の日にRUで壇上に上げられ、学生から花束と線香を貰ったことがある。また調査で何度か訪問したRUで、女子学生に膝を折って深々とワイをされたことがあってあったが、最近顔見知りとなった学生から「ハイ・ドクター・ホー」と気軽に声をかけられ（タイ語でホリウチの発音は大変難しい）、そのうちこの「美風」も廃れるのではと案じている。

2. 大学とRU

本学が関西の他の4大学と連合して1995年に交流協定を結んだRUは、1975年まで師範学校であり、その後に教育大学、そして現在のRUへと発展してきた。タイ全土で40大学、学生数は40万人を越



ウドンタニの小学校での朝礼風景

える一大教育機関ネットワークを構築している。だが2000年まで教育省とは別に大学省があり、大学省の所管する「一般大学」とは規模、伝統、財政そして学生や教員の質において大きな格差が認められていた。いわば日本における旧制帝大と師範学校のごとき格差といえる。だがRUの中には学生数が2万人を越える大規模なものや、その敷地が北大や筑波大より広いものもあり、ここ10数年の発展には目覚ましいものがある。筆者のタイとの関わりはほとんどが、微々たるものではあるがこの格差の是正、解消に関わるものであったと考えるが、他方の従来からの大学が大きな独自資産をもっていたり、授業料を高く設定できたりし、格差解消は容易ではない。

3. チュラロンコン大学とタマサート大学

タイを代表する大学がこの両校で、いわばタイ版の東大と京大、オックスブリッジといえ「チュラ・タマ」と呼ばれている。本学は4年前にこのチュラ大の教育学部と交流協定を結び、大学院レベルでの学生交換をしている。チュラ大は1917年にタイで最初に設立された大学であり、全てに博士課程をもつ18学部、学生数2万5千人、教員数3千人を擁するタイで最大の大学である。これに対してタマ大は1934年に2番目の大学として設立され、全てにおいてチュラ大より一回り小さい。こうした「チュラ・タマ」であるが、キャンパスに入って気が付くのは学生の「雰囲気」の違いである。チュラでは学生全てが制服を着ているが（タイでは大学にも制服があるが、それは白と紺または黒という色が決められているだけであり、シャツやスカートのデザインは自由である）、逆にタ

マの学生で制服を着るものはほとんどおらず、ジーンズが普通である。チュラはその歴史においてエリート官僚の養成機関としての色彩が強く、タマは民間の指導層を多く輩出してきたことからこの違いを培ってきたといえよう。

4. 寺院と学校

タイの小学校の名前は、その多くが「ワット～」となっている。ワットはタイ語で寺院であり、多くの小学校が寺院の敷地に建てられている。つまり「～寺院立小学校」という経緯をもっている。僧侶は学校の儀式に参加してお経をあげるだけではなく、子ども達に授業として説教もする。仏教は「国教」とされていないが、赤・青・白の国旗の白色は仏教を意味しているし、国王が国民を代表して仏教を擁護することが憲法で定められている。教育における「宗教的中立性」は謳われているが、学校には仏像や仏壇があり、非仏教徒には学校における仏教儀式に参加しない「自由」が認められているだけである。教育省の高官や大学の教員に、日本的な「教育と宗教の分離」を説いてもほとんど理解をえられなかった。

5. 僧侶とタバコ

喫煙愛好家たる筆者にとって最近の嫌煙の風潮は「ケムタイ」限りであるが、これはタイでも同様である。全てのレストランは既に禁煙とされ（ただ主として「酒を飲む」ところでは認められているが）、タバコを販売する店も少くなっている。ただタイが全面的な禁煙措置を取ることはまずありえない。それは戒律の厳しい僧侶にとって唯一最大の楽しみが喫煙であることから、タイが仏教国である限りタバコはタイからなくなるからである。人々が僧侶にタンブン（寄進）するために、スーパーなどで僧侶の日常品がセットとして売られているが、それは黄色（仏教のシンボルカラー）のポリバケツにタオルや石鹸、トイレット・ペーパーなどが入ったものである。そしてその中に必ずあるのがタバコである。因みに筆者は最近、タイでの土産に「ポケット灰皿」を用意することがあり、タイでの喫煙マナーの促進に及ばずながら貢献していることを付け加えておきたい。

6. BTSと地下鉄

近年、バンコクでは公共交通の整備が進められてきた。かつて神が天上からバンコクを見て「世界最大の駐車場」といった、という話があるが、車以外に交通手段のなかったことからその渋滞と大気汚染はバンコクを象徴するものであった。だがここ10年ほどの

間に BTS (Bangkok Transportation System 一高架鉄道) と地下鉄ができ、いくらかは解消されてきている。このいずれもが日本の資金援助と技術援助で作られたが、何故かそこを走る車輛は前者がイタリア製、後者がドイツ製である。変な「日・独・伊」3国同盟となっているが、高架鉄道と地下鉄の車輛は好対照である。前者が曲線を使ったスマートな車体と内装であるのに対して、後者は飽くまで頑強剛健な装いとなっている。その料金の高さを除いて、タイ人にはいずれも好評であることは幸いである。

7. ピピとタオ

筆者がタイに行く楽しみの一つに、珊瑚礁の海で泳ぐことがある。そのトロピカル・リゾートは大きく内海のシャム湾と外海のアンダマン海に分けることができる。内海のパタヤ、コサメット、チャーム、ホアヒン、サムイ、外海のプーケット、クラビ、シミランが筆者の征した8大リゾートであるが、この中で海の綺麗さで特筆できるのが、プーケット・サムイの2大リゾートから各々更に船で2時間ほどかかる小さな島、ピピとタオである。この2つを入れれば10大リゾートとなるが、前者は先の大津波で壊滅状態となり、筆者がいつも泊まっていたリゾートホテルが未だ再開されていない。また後者は最近のブームで海が汚染され、珊瑚の多くがダメージを受けてしまった。という訳で、ここ暫く楽しみがお預けとなっているが、素潜りで熱帯魚と戯れる体力が残っているうちに両地が回復し、84～85回目あたりの訪タイ時には再訪できることを願っている。



スアンスナンタRU (バンコク) の舞踊演劇学科学生と

うちは京教生やねん！

日本語・日本文化研修留学生 Rungruangsuparat Supawan
(ルンルアンスパレット スッパワン)

「できれば京都に行きたいんです」関西空港→京都駅行きのバスの中で、私は面接試験を思い浮かべていました。そして、窓に映った自分の姿に笑いました。私は京都弁に関心があったので、特に京都に行きたかったです。「おそらく、あの日の最後の言葉は効果があったから、

京都に来られたんだろう。よかった〜」と考えたとたん、その微笑みが薄れました。なぜなら、余計な喜びより、むしろこの一年間をどのように使えばよいのかを考えるべきだと思ったからです。それに、また“京都弁”について研究しなければならないという責任感を感じたからです。そのような気持ちで、なんとか早く研究して、しっかりやり遂げたいと思い、真剣になってきました。

ところが、ここで生活しているうちに、自分が小さくなったように感じました。道、場所、人々、それらはすべて、私にとって新しいものなのでした。また、



国際交流会館に住んでいるため、様々な国の人々が話しかけてくれました。そこで、自分が知っていることは本当に少ないと思いました。さらに、勉強してきた日本語でも、戸惑うことがありました。

たとえば、日本人用のクラスで勉強している時でした。先生がある問題について学生の意見を聞きました。「賛成の人、手を挙げてください」、「あかん人手を挙げてください」、この間、私がずっと黙っていました。なぜなら、「反対」という言葉をじっと待っていたからです。このように、言葉の不自由のため、やろうとしてもできないことがよくあります。

少し日本に慣れてきたのは、来日して二ヶ月経ち、雪の季節のころです。寒さ以外に、印象に残ったことはタイサークルの時間でした。授業が終わったあと、タイ人とタイのことが好きな日本人が集まり、活動しました。学生にとって、冬の夕方は暖かいうちに早く家に帰りたい気持ちになると思います。さらに、活動の部屋は暖房があまりきかず、とても寒かったです。しかし、日本人のメンバーはみな元気に参加してくれました。ゲームをしたりタイ語を勉強したり、私にとってとても意味がある時間でした。なにしろ、そのもりあがった雰囲気が一番印象的だったからです。



三月になると、春休みの時期に入りました。すると、私はどういう訳か大学を懐かしく思ってきました。授業がある時は行きたくないにもかかわらず、休みになると、行きたくなくなってしまいました。やることのないのはいやですが、自分で勉強するには私がいまあまりまじめな人ではないため、どのように春休みを過ごすか不安になりました。



その時、私の自転車が壊れたおかげで、自分の新しい興味が見つかりました。それは歩くことです。私にとって、日本の曲を聞きながら歩くことは、食べることを除き、もっとも楽しいことです。ストレスを解消できる上に、ものごとをゆっくり考えることができ、落ち着いていられます。学校が始まった時にも、歩いて行きました。毎日同じ道を歩けば、身近な変化がよく感じられました。たとえば、新しいアパートができたことや、ある神社の桜やあじさいが咲き始めたことなどが分かりました。また、途中で集まっているおばさんたちの京都弁の会話も聞けます。私は、京都弁を研究していますが、日本人の友達の多くは関西弁を中心に話すため、なかなか本場の京都弁を耳にできないのです。そして、毎日歩き、何か勉強になることを楽しんでいます。

夏になると、私はゆかたを着て、友達と祇園祭を見に行きました。リンゴアメを味わいながら、屋台でぎしりの道を歩きました。なんとなくタイの祭を歩いている気分になりました。タイの祭にはリンゴアメはありませんが、おもいきり遊ぼうという気持ちは同じです。タイのことを考えた瞬間、私はタイに帰ることを覚悟しました。

日本に来る前は、「学ぶ」というのは、私にとって大学で日本語を勉強することだと解釈していました。しかし、それはやはり間違っていたと分かってきました。大学では、日本語・日本文化を勉強し、また、サークルに入り、気の合う友達と出会いました。さらに、大学に通っているおかげで、私は自然や京都弁も学びました。つまり、「学ぶ」というのは、大学の授業だけではなく、人と付き合うことや歩くことなども含まれていると思います。



今の私は自分が大きくなったとは感じていませんが、日本には親しくなったと感じています。大学を愛しています。墨染駅やその辺りの風景もよく覚えています。この大学に在学している間に、この人々、言語、文化をもっと勉強していきたいと思っています。

京都教育大学のマスコットキャラクター 「そったくん」誕生 募集～決定まで



そったくん

はじめに

京都教育大学は、約130年という長きにわたって絶えず改革を行いながら、「人を育てる」知と実践の拠点大学として、京都をはじめとする地域および日本の教育に貢献してきました。

そしていま再び、京都教育大学は、一昨年の国立大学法人化、教員養成課程に一元化した学部改組などをはじめとして、現代的課題に対応した、教育の新時代にふさわしい大学に生まれ変わろうとしています。

そこで、その新しく生まれ変わった京都教育大学にふさわしい大学のマスコットを選定し、学生諸君・子どもたちだけでなく広く市民のみなさんによりいっそう京都教育大学に親しんでいただけるよう、平成18年1月12日～4月28日の期間、マスコットキャラクターを本学学生・卒業生から募集いたしました。

学長・教職員・学生からなる選考委員会で選考の結果、計16点の応募作品の中から本学卒業生の植原幸治さんが制作された「そったくん」に決定しました。今後「そったくん」には、大学広報誌、ホームページや記念行事・キャラクターグッズ等、いろいろな場面で活躍してもらえればと考えています。

選考委員

- 選考委員長 寺田 光世 (学長)
 選考委員 谷口 淳一 (美術科教授)
 井谷 恵子 (体育学科教授)
 宇澤 美貴 (外部委員)
 本 芳則 (事務局)
 藪中志津子 (事務局)
 西垣 博美 (学生自治会)
 藤原 千晶 (学生自治会)
 河野 竜太 (学生自治会)

選考結果

選考委員会で選考の結果、計16点の応募作品の中から、討議を重ねながら、イメージに合わない作品を対象からはずしていく方式により、本学卒業生の植原幸治さんが制作された「そったくん」(下記)が創立130周年記念マスコットキャラクターに採用されました。

選考理由

京都教育大学が目指す、人を育てる実践的指導力を養う大学というイメージに沿い、コンセプトが明確かつシンプルで記憶に残るキャラクターで、キャラクター名がくんととなっているが、ジェンダー性を考慮した場合においても、キャラクターに男女の区別なく対応が可能なデザインであるため選考されました。

コンセプト

学長室に「啐啄同時(そったくどうじ:啐は口へんに卒)」という額(山内得立元学長の書)がかけてあります。

卵がかえろうとするまさにその時、ひな鳥が鳴くのと親鳥がここから出ておいでとつづくのが同時で、しかもその時親鳥は決して割らずにひな鳥が自分の力で出てくるのを待つという、まさに教育のありかたがこの言葉から見られるようです。

「そったくん」は、京都教育大学が「子どもたちが自らの力でカラをやぶる力」を育てる教育者を養成する大学であることをシンボル化しています。

このひな鳥は子どもたちであり、いずれそのカラをやぶるお手伝いをする教育大生自身の姿でもあります。

原点としての子ども

教育学科教授 岩田 純一

学生・院生の当時は、ピアジェやブルーナという心理学者が発達心理学の研究に大きな影響力を与えていた頃です。とくに認知発達の領域ではピアジェの追試的な研究が隆盛を極めていました。筆者もその例にもれず、子どもの保存概念や空間表象の研究をしていました。同じ二つのビーカに同じ高さだけ水を入れ、それらが同じだけあるかどうかを確かめ、そのあとそれより太いビーカに一方のビーカの水を移し、それと他方に入っているビーカの水が「同じだけ入っているか、それともどちらが多い」と質問します。すると、幼児では水の高さに惑わされ、水位が高いほうのビーカにより多く入っていると答えます。水位というみかけが変わっても量は不変であるという保存概念がまだみられないのです。そこで水を移すとき、ビーカの水位が見えないようにスクリーンで遮蔽して判断をさせることによって子どもの保存概念の形成が促進されるかどうかを試みました。また幼児では、じぶんの場所からみえている風景が、向かい側からみている他者の目にはどのように異なってみえているかを思い描くことが難しいようです。たとえばターンテーブルの上に並べられた刺激布置を使って反対側にいる人形にはどのように光景がみえているかを予測させると、うまく空間表象を変換して人形からのみえ（じぶんには右の物が左に、上の物が下にみえる）を予測することが難しいのです。そこで、じぶんと反対の位置へ実際に回って刺激布置を観察してみる、ターンテーブルをじぶんの側へ回して観察するといった二種の条件がのちの予測に際してどのような経験効果を及ぼすかなども研究しました。

そのあと国立国語研究所では、幼児・児童について語彙の意味概念がどのように形成されるかの調査実験を行い、どうも5歳児と小学4年生あたりに概念発達の大きな節目があることを明らかにしました。また金沢大学に移ってからは、児童の比喩表現の理解を実験的に研究し、乳幼児の比喩表現の収集ならび分析や、幼児絵本や国語教科書に出現する比喩表現の調査・分析などを行い、そこでもいくつかの面白い知見をえることができました。

子どものエピソードへ

筆者が保育現場で園児とかかわる機会が増えてくるにしたがい、そこで出遭う子どもがテキストに描かれ

る子ども像や実験室での子どもたちとは、どこか違うことに気づかされました。そして、しだいに生活者として子どもをながめてみる方が、被験児として子どもをみるよりしだいに面白くなってきました。先日、わたしがアドバイザーになっている保育の研究会でも面白いいくつかのエピソードを耳にしました。保育教室のティッシュ箱が空になり、教師が「ティッシュ取ってきて」と子どもに頼むと、年中児は文字通りに一枚だけもってきたが、年長児では新しい箱をもってきてくれたというエピソードです。ティッシュの箱が目前にあり、「ティッシュを取ってきて」というのは、その箱が空だから新しい箱が欲しいという教師の意図表現です。そのような発話の意図を推論することが年中児にはまだまだ難しいのです。その年中児は鼻をかむとき、お茶をこぼしたときに、いつも教師から数枚ティッシュをもらうように数枚だけもってきてしまったのです。

3歳児の目に砂が目に入り、保育者が水で目を洗うために「目をパチパチしてごらん」というと、その子どもはじぶんの手をパチパチ叩いたそうです。七夕製作（織姫）で折り紙を三角に折り、端と端を重ねるのに「つぎは、コンニチワって合わせます」と声をかけました。子どもがスモックをたたむときと端と端をもって合わせるときの要領として「こんにちは」といつも声かけをしていたからです。すると、多くの子どもたちは折り紙の方におじぎをしたのです。これら二つのエピソードは、保育者の比喩的な表現が子どもにうまく伝わらなかったエピソードです。おとなにはあたりまえの慣用的な比喩でも、3歳児にとって「目をパチパチ」は難しく、やはりパチパチは音のする手なのです。後者の例も、スモックをたたむという躰の文脈ではなく、製作活動のなかでその比喩をうまく転用できず折り紙にお辞儀をしてしまったのです。

日本語には細かな数詞があります。～個、～本、～人、～台といった具合です。教師はいろいろな対象をあげ、それをどのように数えるか子どもに聞いていました。教師がある年長児に「鹿はどう？」と問うと、その子はニヤッと笑って「鹿は奈良や」と答えたというエピソードも聴きました。この子どもはわざと的をはずした答えで笑いを誘ったのです。年長児にはこのような会話能力を身につけてくることがみられるのです。いずれも微笑ましいエピソードですが、そこから

さまざまな子どもの育ちをうかがうことができます。

また保育者と子どものやりとりをみると、そこに保育実践の機微や重要性をうかがうこともできます。ある年中の女兒は、服の着替えでブラウスのボタンの留めはずしがうまくできず、「できない」「やって」といつも保育者や近くの仲間に依存する毎日でした。そこで保育者は「はやくできる魔法をかけてあげる」と呪文を唱えると、やる気を出しじぶんで頑張っているようになってきました。その後、毎日、保育者に魔法をかけてもらいながらしていましたが、ある日、「魔法かけなくてもできる」と魔法なしでさっさとできるようになったという実践エピソードです。ところで、保育者が子どもに魔法をかけるにはタイミングが重要です。魔法がかかりそうな場合、すなわち子どもが頑張れば一人でやれそうになっているかどうかの見計らいが大切なのです。さもなければせっかくの魔法も効きません。そこに時熟を待って魔法をかける保育者の技があります。そのような魔法の支えが、やがては魔法を必要としなくさせていくのです。そのような保育者のことばかけは、子どもから自立をもたらす大切な魔法となるのです。

子どものエピソードから

それぞれのエピソードはじつに面白いですが、たんに個別にみているだけではありません。継続的かつ多様な生活場面のなかで多くのエピソードを積み重ねていくと、そこで多くのことに気づきます。たとえば、ある時期にそれまではみられなかったエピソードが出現し、いくつか類似のエピソードが繰り返しみられるとか、それまで無関係に思われたエピソードには共通した意味構造や機能があることに気づかされ、それらがひとまとまりの意味をもったものとして繋がってみえてきます。もちろん、エピソードにどのような意味を読み取るか、エピソード間にどのような意味的な連関をみいだすかは研究者の主観によります。しかし、それはたんなる気ままな主観ではありません。あくまで積み重ねられたエピソードから生成・構築されていくものです。そして、適否はふたたび子どもの観察に還され確かめられていきます。

子どもの観察は実験的な仮説や研究へと導く重要なきっかけにもなります。いざこざなどで、子どもから「わざとじゃない(知らんとした)」「わざとやる(知っていたやろ)」といった言動がエピソードとしてみられるようになるのは、どうも年中児に入ってからであり、年長児にはそれが一般的になってきます。それは、子どもにとって行為の結果だけでなく、その行

為者の意図(故意か偶然か)が問題になってくるのです。行為の故意性が行為者の責任と結びつけて認識されるようになってきたことを物語ります。そこでさっそく、〈故意〉ないし〈偶発〉行為によって被害を受けた人物の絵図版を使って実験的に確かめる研究(未発表)を行い、予想したような結果をえることができました。また子どもたちをみていると、「根にもつ」と思われるような行動に気づきます。われわれには馴染みの行動ですが、最初から子どもにそのような行動がみられるわけではありません。どうも根にもつと思える行動がエピソードとしてみられ始めるのは4歳になる頃からです。この「根にもつ」という歴史的な自他の関係認識を実験変数とした組み入れた研究の試みはそれほどうまくいきませんでした。しかし、もっと工夫すれば面白い研究ができるのではないかと思います。

原点としての子どもに

たしかに巧みな実験は子どもの発達を探るうえで重要な手立てです。しかし他方では細分化された発達研究は、具体的な実際の子どもから離れてどんどん抽象的になっていく危惧を覚えます。それをみると、そもそもの研究の原点であった生活者としての子どもにいつも立ち還ってみるべきです。そこでの子どもは、子ども自身が自ずと発達の道筋を指し示し、研究を導いてくれる原点としてあります。横断的、縦断的にエピソードを積み重ね、そこに発達という物語を編み上げていくことはじつに楽しく刺激的な作業です。筆者は具体的なエピソードを絡ませながら、乳児から幼児期にかけて自己の世界が子どもから成り立っていく過程を軸として、そこに言葉、認識、感情、対人理解といった側面がどのように連関しながら発達していくかを描きたいと思っていました。幸いにして、それは「〈わたし〉の世界の成り立ち(金子書房)」「〈わたし〉の発達(ミネルヴァ書房)」「子どもはどのようにして〈じぶん〉を発見するのか(フレーベル館)」の三冊としてまとめることができました。今も子どもを観察していて、すでに描いた子どもの姿の修正を迫られるとか、ときに新たな発見をしながら日々学び直しをしています。それらをベースにして、さらに自己とことばの発達というテーマでもう一冊まとめたいと願っています。そして、保育実践(者)と発達研究(者)を繋ぐような研究や提言をしていきたいと思います。それにしても、まずもって執筆や研究・思索のための時間的な余滴が欲しいものです。

附属高等学校校歌に想う

附属高等学校教諭 田中 静子

昭和47年4月、附属高等学校に初任校として赴任しました。昭和45年には本学の学生として5週間、教育実習生としてお世話になりました。教育実習の時の附属高校は、素晴らしい授業をされる、人間的に魅力あふれる先生方と、その授業を受ける生徒の真剣な眼差しが印象的でした。その附属高校に教員として勤めることになるなんて、夢にも思いませんでした。心温かくじっと見守ってくださる先生方と、真剣な眼差しの生徒に日々鍛えられながら、教材研究に明け暮れる毎日でした。やっと周りのことに気を配れるようになり、最初の心にとまったのは、校歌の素晴らしさでした。印象的な出だしと、長い歌詞でしたが、その一語一語に奥深さを感じます。校歌制定から40年を経て、益々、その先を見通した内容に感心するばかりです。「附高20年誌」から作詞者でもある糸井通浩先生（41～49年度国語科教諭）の「校歌制定の思い出」を引用します。

昭和40年4月に開校した本校が、1年後に現在の場所に移転、そして42年4月には3学年とも揃うということになって、校歌制定の話がもちあがった。四方校長・城教頭をはじめ私などがその委員となり、歌詞を公募したが、思うように集まらず、結果的に私の作詞が光栄にも選ばれた。

作曲は、その頃新進の作曲家として注目されてい

る堀悦子さんに依頼、委員数名が歌詞をもって東京のお宅にまでおたずねした。長い歌詞は、作曲上それほど困難はないが、メロディと国語のアクセントを合わせるのがやっかい、各番の同じ箇所に同じアクセントの語がくるとは限らないからだ、とおっしゃったのを覚えている。京都アクセントで、とはつい言いそびれた。

歌は、「ともよ」という呼びかけで始まる。その頃、体育教官に川北智世（ともよ）先生が在職中で、「校歌を聞くたびに、私が呼び捨てに呼ばれているようだ」と笑いながらおっしゃったのも印象深い。

校章にデザインされた「橘」を素材に、その花、実、葉を歌詞に配した。万葉集の「ときじくのかぐのこのみ」と詠んだ歌が念頭にあった。当時まだ私は、同じ国語科の池垣教官と一緒に、美術教教室（山田勇先生）に居候、その部屋で苦心して作詞したのを覚えている。

発表会が岡崎の京都会馆で催され、作曲した堀悦子さんと一緒に、舞台の上で花束をいただいた。私には一生一代の晴れ舞台であった。一度、甲子園の空に響かせたいものだが…。

校歌にでてくる「橘」は、引用文にもあるように、校章にデザインされました。校章の由来を生徒手帳から抜粋します。

京都教育大学附属高等学校校歌

糸井通浩 作

一、友よ

君の眼に僕の眼に
かがやく光だ 今こそ学ぼう
古今東西のことわりを
未来のために きわめんと
心を聞く叡知に生きる
友よ僕らは
ときじくのたちはなの花
きよらかに咲こう この学び舎に

二、友よ

君の胸 僕の胸
たかなる血潮だ 今こそ語ろう
喜怒哀楽を 共にして
心一つにむつみあい
世界を結ぶ夢に生きる
友よ僕らは
ときじくのたちはなの実よ
はつらつと香れ この学び舎に

三、友よ

君の手に僕の手に
あふれる若さだ 今こそ歩もう
艱難辛苦に うちかかって
この混沌の 人の世に
明りをつける勇氣に生きる
友よ僕らは
ときじくのたちはなの実よ
すこやかに繁れ この学び舎に



デザイン 構想 四方実一 本学名誉教授
初代校長

製作 番匠宇司 本学名誉教授
第六代校長

- 図案化した橘の実6個を図形に配し、中央に「附高」の文字が浮き彫りされたものである。
- 橘は常緑樹で神樹として尊ばれ、また京都御所の紫宸殿正面階下にある右近の橘としても古都の地になじみ深いものである。
- 橘の実は、「非時香実（時じくのかぐのこのみ）」といわれ、夏に実り、秋冬になってもなお木にあって香味も変わらないものである。ここから、地に付いた研鑽による結実といつまでも変わらない香りを持つ人間として社会に貢献することを期待するものである。
- 6個の橘の実、本校の教育方針である、民主・文化・平和・健康な身体・高い知性・豊かな情操を

表し、この6項目が実となることを期待するものである。

- 6個の実が丸く配置されてあるのは、これが調和されることを期待するものである。

母校を訪れた卒業生が、校章のついた正門が、閉門状態になっているのを見て嘆いておられました。（危機管理のため、現在、朝の登校時間以外は閉門）校章や校歌は、卒業してからのほうが、より一層、想いが強くなるのかもしれませんが。

今年も甲子園で夏の大会が実施されています。勝者となった高校の校歌を聞くたびに、糸井先生と同じ思いでいるのは私だけではないはずです。

初任校として赴任してから35年、校章の由来や、校歌に込められた、たくさんの人の思いを心に刻み、残りの日々を大切に送りたいと思います。



玄 関

こころとからだのオアシスを目指します

保健管理センター所長 中村道彦

保健管理センターは、本来、学生の健康管理に関わる施設として誕生しました。ある女子学生に「ここは保健室っぽいところですか？」と尋ねられたとき、言葉に詰まりながらも「そうです。」と答えたことがあります。言ってみれば「保健室っぽい」ところですが、しかし、国立大学法人になってから、保健管理センターの役割はさらに重くなりました。学生の健康管理だけでなく、大学と附属の教職員の健康管理にも関わることになったからです。それに伴い、保健管理センターに産業医という役割が追加されました。さらに附属の児童生徒の心の健康についても相談を受けています。



保健管理センターの業務には、常勤専任職員2名（健康管理医兼産業医、看護師）が関わっていますが、他に本学教員の4名（保健医2名、心理カウンセラー2名）の先生にも協力を得ています。この他、2名の非常勤学校医（内科医）と1名の学生課兼務の事務職員が保健管理センターを支えています。

今日は保健管理センター（保管セと略称）の利用の仕方を紹介しましょう。保管セの玄関前で、「ミーちゃん」という陳腐な名前の老猫が迎えてくれることがあります。そしてドアに張り物がしてある時には注意してください。保管セが閉まっている時には「緊急の場合には学生課へ」という案内がでています。

また昼休み（通常は12:30~13:30）のこともあります。玄関を入ると受付台があります。看護師や健康管理医に用事のある時にはその旨を看護師に伝えてください。看護師が受付台にいない時には台上のベルかインターホンを鳴らしてください。インターホンは健康管理医につながっています。

怪我をしたり体調の悪い時には、職員に相談をし



て、必要ならば奥にある静養室で休んでください。体の状態を調べるために血圧や体温などを測定することもあります。保管セには一般薬をおいていますが、頓服用です。風邪薬や痛み止め、傷薬などです。内科の診察を希望する時には、金曜日午後診察日



がありますので予約をしてください。心の健康相談を希望する時は、eメールで申し込んでください。面接日は月～金曜日で男女のカウンセラーが対応しています。心の健康相談室は保管セ2階にあります。

身長や体重を測定したり、リラクゼーション室を利用する時にはスリッパに履き替えてあげてください。玄関をあがるとかわいいロビーがあり、意外と寝心地のよいソファがあります。そこはたまり場、だべり場です。栄養や健康に関する図書もおいてありますから、時間があれば見てください。ソファの側に食生活と生活習慣病を診断できるパソコンがあります。普段はオフ電のため使いたい時は職員に声をかけてください。

少しロビーでくつろいだら、血圧測定でもどうぞ。右腕を小さなトンネルに差し込んで、肩の力を抜き、2～3度ゆっくりと深呼吸をして血圧計をスタートしてください。サティーフ風の眠たい音楽が音声解説と共に流れてきます。測定が終わると、帯状の記録紙に結果がプリンとアウトされます。収縮期と拡張期の血圧、それに脈拍数。一喜一憂してください。

次に身長体重、体脂肪も隣の装置ではかれます。風袋（つまり衣服）の重さ、性別などを入力して、自動測定装置の台の足形に合わせて乗りますと、やがて（少し時間がかかる）頭上から“かまぼこ板”が緩やかに降下して頭頂部をタップします。後は装置から下りて待っていると、帯状の記録用紙に恐るべき体重値や体脂肪、それに身長が記録されています。ここで相当のショックを受けますので、癒しが必要になります。



センター一番奥のドアを開くと、「傷ついた心」を



癒してくれる空間があります。入室前に、利用簿で3台のボディ・ソニック・チェア（奥からA、B、Cと呼んでいます。）のうち空いているものを調べてください。空いているチェアの記号（A、B、C）の下に利用開始日時を記入し、同じ記号のチェアカードと好きなCDを選んで入室してください。CDは自分の好きなものを持ってきてもかまいません。部屋は少し暗くしてあります。他の人も利用しているので、静かに入ってください。椅子に腰掛け、CDを装置に装着し、リクライニングシートを倒し、音量と振動のレベルを決めてください。プラズマ・テレビもありますが現在は使用できません。30～60分ほど、心地よい音楽に包まれた「ゆりかご」の中で心は元気を回復してゆきます。

保管セは学生や教職員のための施設です。誰もが気持ちよく利用できる施設として、その利用にあたっては是非マナーを守ってください。楽しいからといって大きな声で会話をしたり、食べ物を持ち込んで食べたりはしないでください。時には具合を悪くした人が休養していることもあります。また保管セは清潔にしておかなければなりません。

そして保管セは困った時の「駆け込み寺」だけではなく、健康を学ぶための「寺子屋」でもあります。食生活などに関わる図書や看護師による相談も行っています。保管セを豊かな健康づくりに使ってください。皆さんをお待ちしています。

スペシャルクリーンデー

附属京都小学校 副校長 多田光利

平成15年度の北校舎、給食室改修に引き続き、平成17年度には東校舎の改修が終了したことは前号でお知らせしたとおりです。また、平成18年2月1日には簡単にですが、大学関係の方や工事関係の方、育友会本部役員、教育後援会理事の方々にも列席していただき東校舎改修記念式典を実施しました。



そして、多くの人々の努力や協力のもとで美しくなった学校を、さらに美しくしていこうと、今年度から「スペシャルクリーンデー」という日を設定することになりました。これは、日頃の清掃時間では徹底して行うことが不可能な運動場や附属の森（うさぎ小屋やにわとり小屋、池、学級園、学校園、様々な木々がある）の掃除を1ヶ月3回程度、特別に設定した日に、目当てをしぼって掃除をしようというものです。そして、子ども達に学校の環境を今まで以上に大切にするといい気持ちを育てることをねらいたいとも考えました。



1年生から6年生までの各クラスから2～3名が、清掃開始の時刻に決められた場所に集まってきます。各クラスで相談し1年間で1回はこの当番が当たるように割り当てます。毎週金曜日を基本とし、金曜日が学校休業日であったり全校行事に当たっているときは実施しません。集合したらみんなで挨拶をし、まず指導者の話を聞きます。そして、その日の重点活動が何であるかを知り、清掃終了のチャイムで集合、簡単に

反省会をもってその日の活動を終了します。



4月21日（金）に初めての活動を実施しました。

附属の森を重点的に清掃しました。3、4年生の子ども達は、同じ学年の友達と黙々とゴミを集めていました。また、6年生の子どもが1年生や2年生の子どもが出来ないところをしたり、1年生や2年生の子どもも高学年の子ども達に任せっぱなしにせず、力を合わせて一生懸命ゴミ袋に詰めている姿も見られました。



自分達で学校を美しくしていくことの大切さをみんなが気づき、ゴミを集める活動から、ゴミを捨てない、ゴミを作らない活動へと広がり、自分達の学校を自分達で大切に美しくしていくという気持ちが育っていくことを願いたいと考えます。



伝統的な行事『臨海学舎』・『林間学舎』

附属京都中学校 副校長 橋本 雅子

本校では、中学1年生の夏に京都府網野『浜詰』へ臨海学舎に行きます。この行事は、京都中学校創立直後（昭和26年）以来続けている伝統的な行事です。



臨海学舎に行くまでには、一週間の水泳訓練を実施します。本校を卒業した水泳部（紫泳会）の皆さんに助手として参加をしてもらい、泳げなかった生徒もマンツーマンの細かな指導を受けて泳げるようになります。臨海学舎の意義は、次の5つです。

1. 水泳能力を高め、強い体力をつくろう
2. 小遠泳・大遠泳を泳ぎ切り、自己の心身を鍛練しよう
3. 集団で行動することによって、協調の精神を学ぶ
4. 海浜生物の観察をし、海辺の自然を愛し理解しよう
5. 学年での親睦を図り、よりよい人間関係をつくろう

そして、現地では、3泊4日の期間に班別練習、磯観察、小遠泳を経て最終日に一時間を超える大遠泳を向かえます。三列縦隊の隊形を維持しながら、120名の生徒が完泳を目指します。教員も1年生だけの行事にもかかわらず教員全員が引率し、助手の先生のお力を借りながら長年培われたノウハウを基に、共に隊列を組んで泳ぎます。「大遠泳完泳目指して頑張るぞー」「おー」「えんやこらー」「よいしょこら」とかけ声をかけながら、一体となり、泳力の弱い生徒に合わせて全体が前進します。その中で、集団の一員としての自覚も生まれてくるように思います。全員が大遠泳完泳を成し遂げた暁には、全員で「万歳」をし、喜びを分かち合います。

いろいろな方々のご尽力で支えられ、続けられている行事ではありますが、子どもたちが完泳し、にこや

かな笑顔で喜び合う姿を見ると毎年ながら、感無量になります。この行事を終えると、日焼けした体が一段とたくましく見えて、中学生として階段を一段超え、成長するように思います。

また、本校の2年生では、1年生と同じく、3泊4日の行事として、林間学舎に行きます。この行事の意義は、次の4つです。

1. 集団で行動することによって、協調の精神を学ぶ
2. 蓼科山（2530m）に登り、自己の心身を鍛練する
3. 北八ヶ岳の自然を愛し、親しむ
4. 信州の文学・歴史・自然について学習する

集団で登山することは、決して易しいことではありません。自分のペースで好きなときに休憩し、好きなときに飲食できる個人の登山ではないのです。登山のマナーを守り、リーダーの指示に従いながら、みんなの力を合わせてお互いを励ましながら行動することが大切なのです。このために、中学1年生から、比叡山・愛宕山・蓬萊山を制覇し、蓼科山登頂を向かえます。このような経験を通して、より、規律を守り、自然を愛せる子どもたちに成長して欲しいと感じます。



この2大行事は、卒業後、何年たっても語られ続ける行事です。この行事を終え、附属京都中学生としての自覚が生まれると入っても過言ではあません。安全性や授業時間数の確保からいってもリスクを伴う行事ではありますが、リスクを負ってでも続ける意義を再確認し、素晴らしい伝統を継承していきたいものです。

～マレーシア研修旅行～

附属高等学校 副校長 斉藤 正 治

高校生活最大イベントの一つ、本年度の研修旅行は、平成18年7月24日～29日にかけて、2年生196名参加のもと2団に別れて実施しました。附属高校では、教育課程の中に設置されている「総合的な学習の時間」の柱の一つとして「国際理解（異文化理解）学習」を置き、国際化に対応できる生徒の育成を目指し、過去4回にわたり海外研修旅行を実施してきました。その中で3回目のマレーシアになります。昨今の何が起るかわからない世界情勢のなか、出発前のいろいろな準備は取り越し苦労に終わりました。

海外へ出るのは初めての生徒も多く、事前学習を重ねるうちに期待も高まり、とても楽しみにしていました。



関西空港では飛行機が動きだすと笑みがこぼれ、離陸時には、一般のお客さんに配慮して控えめな歓声と拍手が沸き起こりました。

現地では、三つの活動内容があります。異国情緒にふれるゴム園・マラッカ見学、現地の空気を身近に感じ、人との交流がメインのクアラルンプール市内自主研修、選択性による高校交流or森林研究所フィールドワークと希望者によるホームステイです。

マレーシアの天然ゴムは質の良いことで知られているそうです。ゴム園見学では、たまたま、ゴム園のオーナーの方が通りかかれ、ゴムの採取の方法をその場で見せてもらうことができました。地図の上でしか知らなかったマラッカ海峡は、丘の上から大きな船を間近に眺め、昨今話題になっている海賊船の往航に思いをはせました。また、大変暑かったこともあり熱帯に来たことを実感しました。

高校交流で訪問した学校は今年で2回目になります。大変設備の整った素晴らしい学校です。英語を駆使しながら、午前は文化、午後はスポーツと、生徒た



ちは互いに用意したプログラムで交流を図りながら、すぐにうちとけていました。その後、希望者が一泊二日でホームステイに出かけ、心のこもったおもてなしを受け、一夜明けてのお別れは、涙ありの感動的なものでした。

森林研究所のフィールドワークはハードなものでしたが、興味関心の高い生徒ばかりが参加していたので、十分満足のいく活動でした。

旅の楽しみの一つに「食」があります。計画段階から綿密に検討を重ねました。マレーシアは多民族国家（マレー系・インド系・中国系）であるため、ニョニャ（マレーシアの家庭料理）、スチーム（鍋）、本格中華等、様々なものが楽しめました。香辛料の中には独特の臭いのするものもあり、口に合わない生徒もいましたが、これも貴重な体験でした。

生徒達は密度の濃い時間を過ごしました。いろいろな場面でのいろいろな体験が、生徒にとって貴重な経験でした。今後にかしてくることを期待しています。深夜便での帰国になりましたが、飛行機からみる日の出に感動しました。



地域連携・「向こう三軒両隣」のおつきあい —「ごく当たり前」からはじめよう—

附属養護学校 副校長 小竹 健一

- Q1. あなたの職場（学校）の校門のお向かいさんや、向こう三軒両隣さんは、何という名前か、あなたをご存知ですか？
- Q2. あなたは、毎日の通勤路で、あなたの学校（職場）の近くにお住まいの方、何人の方に挨拶を交わしておられますか？
- Q3.

どのような世界（社会）も、地域を基盤として成り立っています。その基盤となる地域を支えているのはそこにお住まいの方々です。地域の方々を知っていくことはその地域を知っていくことにつながり、地域での関係づくりを進めていく上での基礎づくりに相当します。

「地域連携」をお題目ではなく、本気で推進しようとするなら、このようなごく当たり前で簡単なことから始めよう。もし、このような単純なことでも、全教職員がごく当たり前のことであるが、しかし大切なことであると考え、実行していくのなら、その学校は間違いなく、地域から必要とされる学校になりえるであろうから。

本校の放課後は大変にぎやかです。ほぼ毎日のように、地域の子どもたちが養護学校へ遊びにやってきます。多い時で20～30人の子どもたちが、グラウンドでボール遊びをしたり、子ども広場で走り回ったりしています。大人の方も毎日、犬の散歩とかで来られます。



このような日常的な交流のきっかけは、20年くらい前に本校の桜並木の下で行われた町内会の「お花見会」です。そのお花見会は、参加者に世代交代があっても受け継がれて来ています。

また、地域諸団体との定期的・継続的な連携事業も盛んに行われるようになりました。藤城学区社会福祉協議会や砂川保育所等の福祉関係機関と共催している「子育てサークル『かめっこクラブ』（対象：0～3歳児とお母さん）」は、母子60組を超える登録があり、地域では評判の連携事業となっています。3年前より始まった60歳以上の方が対象の「さわやか健康教室」も、毎年参加者が増加の傾向にあります。



ありがたいことに、このような種々の交流の積み重ねで、「学校祭」や「バザー」、「夏まつり」などの行事への外部からの来校者が増加し、行事そして学校そのものが活気づいてきました。

しかし何といても、最近、うれしく・ありがたい出来事がありました。それは、本校の地域である東大山町の町内会の皆さんから「養護学校の門を、大きな災害時の家族の待ち合わせ場所にしたい」との申し出をいただいたことです。養護学校がここ大山町の地に移って、34年目のことです。ようやく地域連携の基礎から、骨組みの中心となる柱ができてきました。



学校経営改善講座を担当して

学校教育非常勤講師 天笠 茂

過日、東京の品川区で小中一貫教育全国サミットと称する集まりがあった。小中一貫教育や義務教育学校の推進に取り組んでいる市区町村教育委員会や学校の関係者など、主催者によると約1600名の参加があった。

そこでのシンポジウムの際、「東の品川、西の京都」と、小中一貫教育推進の一方の軸が京都市との紹介がなされた。

「東の〇〇、西の〇〇」というふれ込みのもと、人々の関心を引く動きが生まれ、一つの時代がつくられることがある。大正自由主義教育が一世を風靡した時代、師範学校の附属学校関係者の間で「東の千葉、西の奈良」といわれたという。

もっとも、その会に参加したある市の関係者は、わが市こそ西日本代表と語っていることを、後日、耳にした。もしかしたら、東日本の関係者も同じような思いを抱いていたかもしれない。皆それぞれ、小中一貫教育をリードするのは、わが市、わが町という自負心を持っているようである。

ところで、その京都を訪れる機会があり、そのたびに、教育改革の在り方をめぐって刺激を受けることが少なくない。京都教育大学には、これまでも教育経営学会をはじめ、研究会、講演会などで、たびたび

かかっている。それに、京都府や京都市の研修会などが加わり、さらに、最近では、京都教育大学が主催する学校経営改善講座の講師として、これからの京都の教育を担うスクールリーダーの養成にもかかわりを持たせてもらっている。これら機会を通して、目にしたり耳にしたりするのが、この地における教育改革をめぐる独特の間合いと独自のペースである。

教育改革をめぐって、その発想にしても、歩みにしても、とかく一本調子になってしまう時代の空気が醸成されつつあり、とりわけ、私の住む関東の地は、その動きが顕著であるように思えてならない。しかし、一元的に直線的に進める教育改革よりも、多元的に複線的に進める教育改革を基本的に尊重する姿勢を大切にしたいものである。

その意味で、教育改革をめぐって、活発に展開される二つの地域が存在することや、独特の間合いやペースを生み出すことのできるもうひとつの地域が存在することは、わが国の教育改革に幅を持たせ平板なものにしないためにも極めて重要ということになる。

さしずめ、スクールリーダー養成をめぐって、すでに実績を積み上げつつある“西の京都”とともに、“東の千葉”といきたいものだと思っている。

キャンパス散策授業

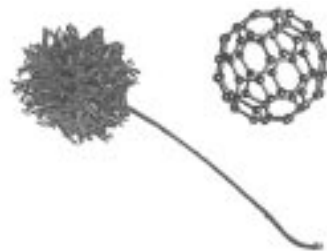
理学科非常勤講師 西田 律夫

「天然物化学」の講義をお引き受けしてから十余年たつ。できる限り身の回りの化学に関心を持ってもらおうと、花やハーブの香り、食卓の味覚、花の色、薬と毒、などをテーマに化学に関連づけて授業を組み立てている。授業のうち一度は教室の外に出て、自然観察会をすることにしている。キャンパス内には実にいろいろな樹木が生い茂っている。主だった木には、燻された木目の美しい手作りの名札が掛けられていて、植物の名前、その分布、生態、利用法などが書かれている。まず正門のすぐ右手にはクスノキの大木が枝を四方に伸ばしている。この葉を手にとって軽く揉むと、樟脳（カンフル）のさわやかな香りが広がり、突然頭がスキッとする。この大木の下で思い切り深呼吸をすると、本当に森林浴。周りにはイブキやマツなど類縁の香気物質を放散する針葉樹もある。これらの植物から発散する香り物質は実際に精神安定効果があるという。私はここですかさず紙芝居をとり出してテルペンの化学構造をインプットしてもらう。

中庭にそびえ立つゲッケイジュはあまり皆には知られていないが、この葉には多数種の香気成分がたまっている。シチューのスパイスにと、何枚か持ち帰る学生もいた。この周辺には、抗がん物質を含むツルニチニチソウやイチイの類、有毒植物もたくさん植栽されている。本館の北側には大きなクワの木がたわわに深紅の実をつけていて、あまり自然に慣れ親しんでいない学生は、甘酸っぱい熟果をこわごわ口にする。メタセコイアの木立を通り過ぎ、グラウンドの北にまわる

と秘密のグミの実もぶらさがっている。グラウンドの東のフウ（カエデの仲間）の木陰には大きな掲示板が立てられ、この木の言われが詳しく解説されている。足元にはフウの実がたくさん落ちている。この実がサッカーボールの形をした魔法の炭素“フラレン”と同じ幾何模様であることを解説の挿絵で知り、（今は得意になって説明しているが）私もその見事な形に感動した。まさに教育大のキャンパスは天然物化学の大きな箱庭、すばらしい自然教室である。

理科離れが危惧される中、自然に親しむきっかけを子供たちに与えることの大切さを痛感するこのごろである。私は、いまだに存じ上げないが、しゃれたユニークな樹木ネームプレートを製作された方々に心から敬意を表する次第である。



図の説明：フウの実（左）とフラレン（C60）
フウの実のとげがはずれるとフラレン構造が現れる

京都教育大学大学院を修了して

京都市立大藪小学校 教諭 勝木 清隆
(学校教育専攻学校教育専修 平成17年度修了生)

東京の私立大学を卒業後、京都市の小学校の先生として勤務していた時に、京都市教育委員会から現職派遣のお話を頂き、平成16年度から2年間、現職派遣の大学院生として京都教育大学大学院で学ぶことができました。

大学院の授業では、普段なら、さっと流れてしまうようなことや何気なく使っている教育用語についても、その意味や背景などを勉強しながらじっくり考えることができました。また、年齢が何歳も違う仲間と議論したりする事が楽しかったです。大学生の時は、勉強することの楽しさをそんなに感じていなかったように思いますが、「勉強って楽しいな。」そんなことを改めて感じることができました。

修士論文の研究ということを通しては、研究内容を深めたというより、どのような道筋で取り組んでいけばよいのか、どのような見通しをもって進めるといいのか、ということなどを少し経験できたのではないかと考えています。

振り返ってみると、あっという間でしたが、自分にとって貴重な2年間となりました。2年間を通して、

「立ち止まってじっくり考えてみることの大切さ」や「研究を進めていくときの方法」などたくさんのことを学ぶことができたように思います。

今年度(平成18年度)は、京都市の教員として新しく採用された方の初任者研修指導員として、3つの学校を回りながら4名の方の研修指導をするという職務を頂きました。2007年から2010年にかけて、「団塊の世代」と呼ばれる先輩方が退職されると同時に、初任者の方がたくさん採用されることとなります。初任者の方の実践的指導力向上に向けて、大変重要な職務だと考えています。さらに、今年度から京都市の方で取り組む「京都教師塾」のお手伝いも少くさせて頂くことになりました。

初任者の方は、学校現場というすごく速い流れの中で日々、実践に取り組まれています。そうすると、なかなか、実践をしている自分の姿を客観的に振り返ることは難しいのです。「初任者の方が自分の姿を振り返る」ことができ、「改善点に対しての取組の見通し」がもてる。私自身の取組も振り返りつつ、がんばっていきたくと考えています。

学ぶこと、人生の楽しさを子どもたちに

大阪市立榎並小学校 教諭 山本 幸子
(理系教育専攻 平成14年度修了生)

私は、大学を卒業して、4年が立ちました。

小学校の現場に4年目、現在は、四月に入学したばかりのとてもかわいい純真な1年生の子どもたちとともに勉強に励んでいます。子どもたちには、学ぶ楽しさを知ってほしい。周りには、おもしろい人、もの、こと、自然、であふれることに気がついてほしいと思う。なぜなら、大学で私は、学問の楽しさに出会い、教師の面白さを知ったからです。私が、この京都教育大を志望したのは、オープンキャンパスの時に「キャンパスに占める自然の割合が日本で2番目に高い」と聞いたこと、そして、「先生がおもしろそう」という単純な理由でした。

4月になり入学し、「さあ、どんな勉強をするのか」と楽しみにしていると、「今まで学んだ小学校や中学などの先生で恩師だと思える先生に話をきいてみよう。」と言われ、今までの勉強と違うと感じました。勉強への思いが変わりました。苦しい課題もたくさんありました。理科系の学生ということもあり、学内の木や石の観察、外に巡検に行ったりするなかで自然のおもしろさを知りました。自分がやる気になれば勉強の方法は無限だと、目が覚めるような感覚にも襲われました。勉強の楽しさや方法を学びました。

何より、大学の先生方がとても魅力的でした。それぞれの先生が自分の専門分野にとっても思い入れを持っておられ、理科の先生だけでなく、教員養成の科目で

関わった音楽や社会など、どの先生もとても魅力的でした。授業の内容もさることながら、授業の中で聴いた若い時にした冒険の話、その資金集め、その行動から見つけた感動など、どれもがおもしろかったです。教育委員会から来られている先生の熱い講義も胸の中に響きました。多くの素晴らしい先生に出会えたのも、この教育大学ならではの魅力ではないでしょうか。

そして、実習でお世話になった附属の小学校や養護学校の先生方は、子どもたちのことを考えて、一生懸命でした。教育実習では、授業が下手で夜遅くまで残って授業の仕方を特訓していただきました。実習の時、国語の授業で、戦争のことを知るために「ほたるの墓」をみることになりました。当然テレビで見ると思っていたのですが、子どもたちに伝えるように遅い時間にもかかわらず、大きなスクリーンを先生はさがしてきました。子どもたちを考えればこそその行動です。こんな先生がいるのだ、こんな先生になりたいと思う先生がいっぱいでした。大学院に通った4年間、多くのことを学び、たくさんの人に出会い本当に楽しかったです。大切な友達にも出会いました。この大学に通って本当によかったと心底、思いました。どの子どもたちも未来に羽ばたく翼をもっています。「その可能性を伸ばす一つになりたい」それが大学で学ばせてもらった自分の使命なのだと思っています。

田村一二先生と知的障害児(者)教育

吉永太市

平成18年4月、滋賀県湖南市に田村一二記念館が設立されています。この記念館は、今から10年前にこの世を去った、田村一二先生の優れた業績を遺し、世に広く伝えるために設立を思い立ったものであります。現在の記念館は、先生生前の居宅をそのまま使用し、遺された著書を含む書籍、その他の資料、生涯を通じてとり組まれた絵画の作品を保管し、公開しています。そして、さらに資料の収集も企てていますし、あわせて、教育、美術、福祉に関連する展覧会や、研究会などの催しも開いてゆくつもりです。今のところは、月1回のみの公開ですが、漸次拡充をはかるつもりです。

先生は、我国知的障害児(者)教育の先駆者として知られています。

先生が知的障害児教育に着手したのは、昭和8年のことで、京都師範学校専攻科を卒業、直ちに京都市滋野小学校の特別学級に迎えられてのことです。当時の我国には、わずかの特別学級しか設置されていず、京都市でさえ、設置校は9校を数えるだけであり、知的障害児にたいする教育には殆んど手がつけられていない状態でした。当時70万人いるといわれていた知的障害児は、教育の機会からも、社会からも締め出され、家の奥深くに、人目をはばかって、息を潜めるように暮らしていました。

先生は、このような知的障害児教育の萌芽期とも言える時期に、その教育に関わり、成熟期にいたる長い期間、実践を貫き、開拓に責任をもち、常に先頭をきって切り拓いた人であります。

先生も、学校へ赴任した当時は、特別学級の何かを知らず、不本意な人事に戸惑い、自棄になった時期もありましたが、やがて、先生の透徹した眼は、外からは覗う事の出来ない、知的障害児の内面の清らかさ、内に秘められた独自の能力の存在を認め開眼し、さらに見方を進めて、この世に無駄な人間はいないという確信に到達しています。そして、障害者は、誰からも相手にされず、周囲からのつながりが全く絶たれていることに気づき、そこに根深い社会の問題を認めています。そして、その開眼を機に全力を傾けて教育実践に取り組み、独創的に進められた実践は、戦前にはやくも知的障害児問題への世の注目を集めるに到っています。ところが、特別学級での積極的な実践にもかかわらず、学級は、10年間の実践を

もって、戦時による閉鎖で終りを告げています。先生はその事を機に、それまでの学校形態の中ではできなかった、障害児との起居を共にする「生活即教育」の場を求めて滋賀県に移り、戦中、石山学園を、戦後には近江学園、次いで一麦寮と施設を設立し、32年間、教育・福祉の両面にわたり、画期的な実践を展開し、戦後の学校や社会福祉施設に大きな影響を与えています。ついで、施設を辞してからは、あらゆる人が尊重され、人と人、人と自然が調和して存在できるような理想郷、「茗荷村」を構想し、世のあり方に一つの指針を与えています。

先生ほどに、様々の知的障害児(者)に向かい、それぞれの心の中に奥深くに入りこめた人は少ないでありましょう。それは、先生の画家としての自由で、創造的な資質に負う所が大きいし、文筆、演劇、造形、音楽、建築などに非凡な力を発揮し、子ども達の心を強くとらえることが出来たからでありましょう。また同時に、子ども達の創造活動を多方面に、豊かに引き出してもいます。先生に見るような広範で、各分野に優れた実践は、世界にも他に類をみないところなのです。

その才を示す一例ですが、先生が一麦寮を創立して間もない頃、プール建設を提案しています。プールと言っても、寮には水道はなく、井戸はあっても生活水にも事欠くような状況で、しかも、金も乏しく、全く可能性のない事情にありました。しかし、先生はプールのない施設など考えられないと言い、早速に、近所の渋る農家を説得し、400メートルほど山上にある池から水を貰い受ける事にし、自力でパイプをつないで水を導くことに成功しています。プール本体もほとんど先生が、コンクリートを手で練って、レンガを積む工法をとって進め、寮生も多く参加して、短期間で完成をみえています。このプールに傾けられた、先生の発想、行動力には驚かされます。しかし、当時施設にプールなど誰も考えなかった時代に、あえてプール建設に向かおうとする先生の動機こそが尊いものに思われます。それは寮生の声にならない欲求を受けとめ、強い人間的共感をもっておこされたものでありましょう。

先生程に、知的障害児(者)の心の中をおしひろげて見ようとし、そこに深く入った人は他にないのであります。

第118号の読者の皆さまへ

KYOKYO をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地
京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail: kouhou@kyokyo-u.ac.jp

118号編集後記

広報118号をお届けいたします。特集は今年10年目を迎えた「子どもふれあい教室」を取り上げました。この取り組みは、毎年夏休みを利用して、市内の子どもたちや保護者の方に呼びかけ、本学の学生とともにゲームや工作、泊り込みのキャンプなどを実施するもので、例年100名以上の子どもたちが参加して楽しんでいます。この取り組みは文部省のフレンドシップ事業として「教員養成大学・学部」で始められたもので、現在は実地教育の実習として単位化され、大学の1年生を中心に数十人の学生が履修しています。近年学校ではさまざまな教育問題が起きており、そうした教育課題に対応していくためには、しっかりと子どもに向き合い、実践力に富む教員の養成が必要となってきました。「子どもふれあい教室」は、教員となるための実地教育の最初の実習となっています。子どもたちの楽しそうな様子、学生たちのがんばりを見ていただきたいと思います。ところで本学では今年度からの総合科学課程の学生募集を止め、学校教育教員養成課程に一本化しました。実地教育としては、このあと1年生の後期に新設された「公立学校等訪問研究」という授業を履修します。この授業ではさまざまな公立の学校や教育施設を見学し、体験を通して現実の学校現場を知ること重点を置いています。こうした実地教育の系統化の取り組みの一端を知っていただければ幸いです。

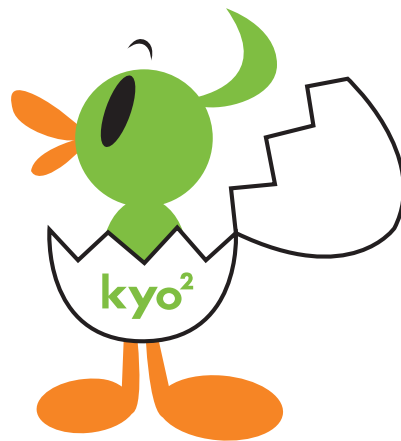
「附属学校だより」は4つの附属学校を挙げています。残りの3校の便りは次号に掲載いたします。なお表紙は附属養護学校の藤原和さんの作品です。のびやかな筆致をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 武蔵野 實



地域連携・広報委員会

委員長	武蔵野 實				
副委員長	谷口 淳一				
委員	広木 正紀	田中 里志	浅井 和行	樋口 とみ子	
	松井 仁	香川 貴志	村田 利裕	宇野 和樹	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第118号

発行日
2006年10月31日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp>